

“自然保護”とは何か

井 手 貢 夫

ここのとこ回数にわたって会誌や会報のうえで、自然保護という言葉の意味、ないし概念が問題となつて、それぞれに有益な注目すべき発言がなされていく。そしてそのことは、この言葉が非常に複雑で多様な意味をもっていることを示すとともに、したがってまた多くの論議の種にもなり、ひいては誤解や曲解の因にもなり得ることを示している。

そこで私は、私なりにこの問題を考えてみたい。大げさな方になるが、「自然保護」という概念確立へのひとつの試みとして、私はこれを書き出すのである。多くの方々が反論や是正・補足でもって、私のこの試みをより完全なものにしてくださることをおねがいし、期待したい。

「自然保護」とは何か——まず「自然保護」という前に、自然とは何か、ということが問題になる。私はこれを、つぎのように分類できると思う。

(a) 最広義での自然

宇宙万物、森羅万象いっさい、もちろん人間をもふ

くめてのいっさいを自然とみる見方である。しかしこれは、私たちの非常に漠然とした感じ方ないし考え方であつて、ヨーロッパでむかしから考えられている自然というのは、むしろ人間に対立するものとしての自然物である。それは宇宙万物というより広いものでなく、地球上の被造物、しかも人間をふくめない被造物というのが本来の意味であろう。見出しに書いたような最広義での自然というのは、むしろ宇宙万物というほうが言葉としては適切で、東洋ではむかしから天地自然といったいい方で呼ぶのが普通である。そして東洋的な考え方からいえば、この天地自然の中には人間もその一員としてふくまれているのであろう。

しかしヨーロッパでは、人間に対するものとしての被造物、自然というのが根本的な考え方である。ただ学問的な対象として自然の観察研究が行なわれ、その自然万象の中の、ことに生物についての研究が本質的には人間にもおよんでこないわけにはいかないの、ごく一般的ないい方としては、人間をもふくめてのいっさいを自然とみる見方がなり立つので、それはしか



しごく近代になってからの考え方のようである。ところで宇宙万物というばあいには、もちろん地球もふくまれるが、このばあい、地球はその一小部分にすぎないので、私たちが通常考える自然とは非常に時限を異にするともいえるが、一方で、これらすべてをひっくるめて自然現象と呼ぶことも私たちが常識的にはしていることである。したがってもっとも広い意味での「自然」という言葉の使い方として当然考えてみてよいと思う。

しかしここにもひとつ、問題がある。「神」の概念であつて、私たち日本人にはあまり問題とならないであろうが、キリスト教の考えでは、神はこの宇宙万象の上にあることになって、この「自然」の中にはふくまれないことになる。したがって「自然」の摂理は神の力、あるいは神の意志の発現という考え方になるので、神によってこの宇宙万象が支配されていることになる。

しかしこうした考えの中にも、種々の段階があつたとせば、ゲーテが青年時代に深い影響を受けたスピ

ノーザの、宇宙を支配する予定調和の説などは汎神論の第一歩であつて、ゲーテなどは生来の素質と傾向とに、そこから汎神論的な思念の裏づけを得たことである。しかしそういう考えの中でも、西欧人には、そうした宇宙万象の一切の神秘的力の象徴としての神の概念という以上に、信仰的な、もつと現身的ないし人格的な神という対象が心情的には生きていたのである。

そしてそういう信仰的、ないし心情的神がいつでも、あるいは時として自然現象の中に、あるいは自然現象を越えてあらわれてくることは、現代においても予想以上に強いことができる。

その神の姿、ないし神のあらわれ方においては人によつてまことに千差万別ではあろうが、自然を通して神に近づく、あるいは自然の中に神を感じるということとは、古くから現代にいたるまで多くの詩文・哲学の中にその形を見いだすことができることで、それによつて人々は新たな生命力を得て、日常の生活の中に立ちもどつてくるのである。

ダーヴィンの進化論、ひきつづいておこつた唯物論が、自然現象を見るうえにも大きな影響をおよぼしたことは当然のことで、ある意味では人間中心の功利主義的な面が強調されることにはなつたが、自然現象の美しい面、都会生活や社会生活からの解放感、自然物の美しさなどまでは否定されてはいない。

進化論は、一方で従来のキリスト教信仰に非常に大きな波紋を引きおこしたのが、生命哲学に大きな力を与えて、唯物論と唯心論を越えた汎神論的思想に一層豊かな裏打ちをすることになつて、この面で自然現

象というものと人間感情とのつながりを一層緊密にしたということができよう。

東洋人の宇宙観や自然観は、西欧にくらべてもつと直接的である。しかも、自然物に対する近親感にあふれている。西欧の自然観がキリスト教の影響によるところもあるが、つねに自己中心的で、人間を神の似姿としてつねに自然の中で特別の位置を与えているのに対して、東洋では仏教のはじめから人間と一般の自然とを同一視している。キリスト教でも聖フランシスのような例外はあるが、人間と被造物とが同じ立場で考えられるようになったのはアルバート・シュヴァイツァーあたりからで、一方では進化論による裏づけによつて、はじめて一般化されたといひ得よう。

東洋人にとつて、自然は天地悠久の姿であつて、それは時には怖るべき破壊力、はかるべからざる偉大な神秘な力、あるいはまた悪疫の流行・ききんなどの現象として神とも鬼神ともなるのであるが、また雪月花の美と無常とを通して、つねに人間の親しい友でもあつた。そこには宇宙的な広がりとより、太陽や月や星にしても、もつと感性的な身近なものであつたようである。そして自然の偉大な力、神秘に通ずることによつて人生自然の奥義に参入し得ようとしたのである。

日本人の自然と人間との関係をじつによく象徴するものとして、俳句の季語をあげることができよう。これほどこまやかに人間と自然との関係を示すものは、ほかに例を見ないといえるだろう。したがつて日本人にとつては、西欧の汎神論的な考え方は容易にとりい

れることのできた思想であつたであらう。

(b) 狭い意味での自然

これは人間に対するものとしての自然である。すでに述べたように、日本人の常識的な意味では、人間も自然の一部にはちがいないのである。人間の周囲の自然に対する影響がとくに強くなつて、自然現象・生物・景観などに大きな変化をおよぼすようになってからは、いつそう人間に対する自然という考え方が強くなつたであらう。これも前に述べたように、西欧的な自然観の中にはこれは底流としてあつたものであるが、それがむしろ悪い面の影響力として、改めてその対立が意識されてきたといえよう。

しかもヨーロッパで最初に問題になつたのは都市周辺の自然であつて、そういう意味では田園的な自然であつた、といえよう。田園的な自然の破壊から、いきおい原始的な自然への憧憬が生じ、そこからまた、人間社会に対する一般的な意味での自然というものが意識されてきたわけである。

しかし厳密な意味においては、といより私たちの現在の感覚からいへば、人間も自然の一部であることにはかわりないので、厳密に人間と自然とを区別することは不可能なことである。したがつて人間の自然に対する影響というけれども、その影響は当然人間にはねかえつてこずにはいけないので、それゆゑにこそまた自然保護という問題も起こつてきたわけで、人間に對立するものとしての自然という考え方には、それ自体に矛盾が内包されているわけである。ここからも自然

保護というばあいの自然という意味に、さまざまな混乱のおこる可能性があるわけである。

公害現象などは人間に対するものとして、人間と切りはなして自然を見ようとするこの誤りに対する、もつとも手きびしい反証といえるだろう。人間に対する自然が、人間と切りはなして考えられ、実際にそうとり扱えるものならば、公害現象に対しても、他人事としてそれを客観的に処理すればすませるわけであるが、じつは人間自身がその対象としての自然の中に住んで、その影響をまともにするものだから焦眉の大問題ともなるわけである。

それはともかく、従来の人間に対する自然が、前述のように田園的な自然から一般的原始的な自然に拡がっても、それはおもに地球上での自然であったものが、現在ではやはり宇宙的な規模に拡がらざるを得ない。すでに宇宙衛星の打ち上げや、さまざまなロケット実験、さらには原子爆弾の実験、そこまで行かずとも航空機の発達だけでも、地球をとりまく宇宙は、はなはだしく汚染されてきているわけである。

このように考えると、狭い意味での自然というのは人間と対立するものとしての自然ということで、広い意味での自然とは、人間をふくめるかふくめないかというだけのちがいがいになるといえよう。しかもそれが、実際には人間の主観的な立場の設定にすぎなくて、人間もふくめての自然ということに始終立ちもどって考えなくてはならないことが多いのである。このことは私たちが自然保護というときにじゅうぶんに自覚していなくてはならないことで、多くの混乱がそこから生

じてくることである。

(c) 自然保護の対象としての自然

会誌第七号でも疑問が提出されているが、私たちにとって自然現象というものがすべて喜ぶべきものでないことはもちろんである。またヨーロッパの気候が日本にくらべて比較的おだやかで、台風や地震などがないことは事実であるが、しかし、フェーン現象や春の雪だけの洪水・なだれなどの被害はたびたびあることであるし、中近東では最近も地震の被害は多い。そういう禍いの自然現象が自然保護の対象にならないことはもちろんで、簡単にいってしまえば、私たちにとって喜ばしい、私たちに休養と喜びとを与える美しい、あるいは壮大な、好ましい自然や貴重な自然などに限られることになる。

前にも述べたように、自然保護ということがそもそも唱導されるようになったのは、中世以来の都市周辺の美しい、あるいは田園的な自然が、産業革命による工業の発達によって害せられるということが原因であったので、それは最近になって都市周辺の自然の復活を叫ぶのにも似ている面がある。そういう意味では、最近にいわれる生活環境の改善にも似ているところがあるが、しかし、もちろんそれだけではない。生活の近代化に対して、ルソーが「自然に帰れ」と叫んだのは、人工的な虚飾に充ちた人間生活に対して、もつと素朴で、原始的な生命にあふれた悠久な自然への復帰を求めたのであって、そのそこには自然の秩序と偉大さを通じ、神にいたる信仰があったのである。

日本人の自然観は西欧的な、根本に主知主義的な思想があるのとはちがっているが、大自然の中に生命の根源的な力を求め、大自然とひとつになろうとする心には相通するものがあつたし、現実に関心愛してきた自然が失なわれ傷つけられるにいたると、西欧的な自然保護ということがそのまま受け入れられるにいたつたのも当然のことであろう。自然保護ということがとかく利用面や現実の自然破壊からの防備・生活環境の改善という方向にのみ力をおかれて、大自然のもつ精神的な力と影響とが等閑にふざれているような感じがすることも、現実にはそれほどわれわれの周囲の自然の汚損破壊がはなはだしく、その対策に追われることに急なるあまりであるということができよう。

現実の問題として、厳密な意味での処女地というのは、現在の地球上にはすでに求めがたいといわなくてはならないだろう。グリーンランドの水上の、鉛の堆積量の増加が論ぜられるこんにちにおいては、南極も北極もヒマラヤの山奥も、どんな南海の孤島も、まったく汚損されていないことはいえないのである。宇宙でさえも、常識的にいって地球周辺はすでに各種のロケットや、衛星の打ち上げによって汚染せられているといわねばならない。したがって処女地とか原始的ということとは、いまは比較的という意味でしか厳密には使い得ないということである。

このことは、いわゆる原始的な自然というもの私たち人間に対して持つ意味が、以前とは比較にならぬほど重要になってきているのみならず、したがってまたこれの保護管理および利用についても、従来以上に綿

密な配慮が必要になってくるだろう。

□

以上、自然保護の対象としての自然について歴史的な推移を述べてきたが、これをもう一度、整理しながら項目別に分類して考えてみよう。

☆原始的な自然の保護

前述のように、都会文明や産業革命の弊害から脱れたいという気持が、具体的には人工的なものから自然にもどりたという欲求になって、一方では、文明をすててもっと素朴な原始生活にもどそうとする運動になって、その極端な形が、こんにちなおつづいている裸体運動であり、こんにちのいわゆるヒッピー族などの中にも、こうした考え方の新しい形式を見出せるであらう。

しかし一般的には、大自然の中に生活するということで、自然の中で農耕狩猟によって生活するという、いわゆる田園生活、ないしは農漁民生活という生活を個人としてとるということになる。トルストイをはじめ武者小路実篤の新しい村なども、そうした運動のひとつにあげられよう。島崎藤村が小諸に居を移したのもそれであつたらう。ゴーガンやタヒチ島の生活もそうである。

しかし一般の人たちは、そこまで原始に帰ろうとしないまでも、日常の生活の中から、ときに原始的な自然にひたろうとする欲求をもつことは自然のことである。旅に出ようとする欲求、あるいは日常生活の緊張と惰性から離れて変化を求める、いわゆるレジャー・シヨンの欲求がこれにダブル、あるいは混在するとい

うことも当然のことで、この点で原始的な自然というのは、その利用面で複雑な要素をもたざるを得ない面があらう。

しかし、もちろんその人たちにとって重要なのは、原始的な自然そのものであるはずである。そして地球全体にわたって汚染がひろがりつつあるこんにち、いかえればなんらかの形で人間の影響がおよびつつあるこんにち、それだけに原始的な自然のもつ貴重さは非常に高いといわねばならない。それはもはや、精神的な意味においてだけではない。むかしから考えられているような大自然、いっさいの汚濁を浄化して調和ある世界を保持し得た原始的な自然は、いまはあらゆる生物の生命の源として貴重なかけがえのないものである。

そこで、その原始的な自然をできる限り人間の手を加えないで、そのままに残しておきたい。まして人口稠密で国土の狭いわが国で、開発が進み、公害問題の深刻なときに、残されている原始的な自然の貴重さはいくらでもないことである。

ただ、原始的な自然というものは、その原始性を保持するためにも、四周からの人間の影響が深刻なだけに最小限度ある広さと不可侵性を必要とする。その最小限度のある広さというものをどのくらいにするかということは、周囲からの影響度の測定によって決定することもできるだろう。

たとえば、周囲の騒音、汚染などの人工的影響がその内部におよばないことを前提にして、しかもその内部に鳥獣の原始的な生息に必要な広さというものが加えられて、その最小区域というものが決定されねばなら

ないうえに、それを利用する人間の数が考慮されねばならない。もちろんこうした原始的な自然は広いに越したことはないの、ことにこんにちのように人間の影響力の強いときには得る限りの広さが要求され、またそのような広さをもつことによって、その原始性がいつそう高まるということが出来る。

ところで、そうした原始的な自然をどのように利用するか、ということである。原始的な自然の利用は、できる限り原始的であるに越したことはない、ということが出来るだろう。したがって、その原始境に到達するまではともかくとして、その原始的な自然の中では、できるかぎり素朴で簡素な自然の享受が行なわれるべきである。ただ、その利用者がいちじるしく多いばあいには、いろいろの制限や設備が必要なことはいくらでもない。

ただ人間は、ことにこんにちの人間はどんな素朴な生活の中にも、あるていどの文化的な面をもたざるを得ないのである。ましてキャンピングや登山者などのように、いわゆる大自然の中に生活しようとするのはちがって、外からこの大自然を眺める、いわゆる観光客のためには、大自然を眺め味わうための設備としてじゅうぶんな設備が必要となる。ただ、私たちが嚴重にいましめなくてはならないことは、そういう設備、ことにホテルなどの内部のぜいたくな設備を決してホテル外に、すなわち大自然の中にもちこんでほらない、ということである。

もうひとつ重要な問題は、原始的な自然の管理問題である。すなわち原始的な自然は、いわゆる人間の影響で

ないかぎり、いっさいをそのなり行きにまかせる、ということが自然である、ということがいえるにちがいない。したがってもし鳥獣が死んでも、その死骸はそのままに放置されて自然のなりゆきに任せる。嵐で樹木が倒れても、大きな被害がおこっても、それはそのまま放置して自然の回復に任せる、ということである。

ところで、こうして自然に放置するということは、それがまったく人間の知らないところで人間に気づかずに起こる場合と、こうして人間が原始的な自然を残そうとして、いわば積極的に放置するのではかなり意味がちがう、という考え方ができる。すなわちこの保護された原始的自然は、それだけ人工的である、といういい方もできよう。しかしそうした考え方には、多分に言葉のうえでの遊戯的な面が多い。じっさいには、特別のばあいを除いては故意に放置された自然と気づかずに放置されている自然との間には、その自然の存する場所がとくに人間社会によってはなほだしく近しく囲まれていないかぎりは、特別の差異はないと考えてよいであろう。

むしろ問題は、われわれが当初原始的自然として保護し、維持しようとしたその最初の形を、それがとくにわれわれにとって好ましく美しいと感ぜられるばあいに、それをどこまでも残そうとするばあいである。また、獣の死骸の放置がいちじるしく不快感、もしくは不都合を生ずるといふばあい、あるいは樹木が倒ればそのために病菌がふえて困るので、それを整理してふたたび新しく樹木を植える、といったばあい、ま

たは華嚴の滝の岩石の崩壊を防ごうとしたり、富士の山くずれを防ごうとするなどは、これは明かに人工的な原始性の保護ということになる。もちろんそれは、それなりの意味をもつことである。

そしてじっさいにわれわれが保護し保存しようとする自然には、時、ところ、ものに依じて、こうした両面の管理が行なわれているのがじっさいであろう。

☆作られた自然、あるいは自然らしさの造成——

ここまで書いてくると、作られた自然という言葉がおかしくなくなってくる。たとえば、私たちが庭に一本の木を植える。その木が成育し茂ってくると、私たちはそこに自然を感じるのである。木が茂れば花も咲き、鳥も来て歌うようになる。太陽が光線を投げかけて、木に光とかが微妙な複雑な陰影を与える。雨にうたれ、風に吹かれ、紅葉して、そのときどきの趣をかもし出す。それは人が植えたものではあつても、自然物には人工のものとはまったくちがう世界が生まれる。そしてそこに、私たちは大きな自然の縮図を見出すのである。

私たちが、植物でも動物でも、戸外の自然の中で自然物を栽培し飼育するときには、それは自然を作り出すことになる。人間の生活と自然との融合した世界が生まれるのである。田園風景とか、農漁村風景とか呼ばれるものがそれである。並木・街路樹や公園は、都会生活の中にすこしでも自然を生かそうとし、すこしでも失われた調和をとりもどそうとする試みである。

人間はみずからの手と工夫とで、人工的にいろいろ

なものを作ってきた。しかし、人間が人間の力だけにたよっていると、しまいに生きてはゆけなくなるのである。地球の上を、あまりに人間と人間の作ったもので埋めてしまった結果が、公害問題である。大自然というものは、ひとつのものに偏してはならないらしい。それが自然の理である。

一体、自然の理とは何だろうか。それは、大自然の中を貫いている理法であろう。私たちは自然のなりゆきという言葉を使う。人間の生命が脅やかされれば、本能的に生命を守ろうとする。そしてそのための努力をする。しかしそれが、全体としての自然の理法になわなないとその生命は減びてゆく。それが自然のなりゆきということであろう。スピノーザの予定調和という言葉に、私たちは近代的な、より深刻な解釈をほどこさなくてはならないのだ。

人間は、やがて滅びるのかも知れない。あまりに人間の世界をひろげすぎ、人間の力をふるいすぎたのであろう。だとすれば、それが自然の理であるならば、どんなにあがいても仕方ないことかも知れない。しかし、人間の生きる道が残されているとすれば、それは私たちがここで謙虚にもう一度、自然の理法に耳を傾けること以外に道はないのである。自然の理法は、さぐればさぐるほど深く神秘に充ちている。私たちは謙虚に、畏敬の心をもって自然の中に帰り、自然の声を聞かなくてはなるまい。ルソーの「自然に帰れ」という言葉を、この意味で私たちはもう一度深くかみしめなくてはならないときに来ているのである。